

ボスニア・ヘルツェゴヴィナにおける多民族共存の可能性

原口 岳久

日本大学総合社会情報研究科

Possibility of Coexistence of Different Ethnic Groups in Bosnia and Herzegovina

HARAGUCHI Takehisa

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

Bosnia and Herzegovina experienced a civil war from 1992. This war is well known for its savageries such as ethnic cleansing and the siege of Sarajevo. Though the war ended in 1995, there is no more old Bosnia and Herzegovina where people of the different ethnic groups naturally coexisted. Is it impossible to realize the coexistence of ethnic groups in this country?

If we look into the history of Bosnia and Herzegovina, we can learn that this multi-ethnic country has always had a possibility of disruption by ethno-nationalism. The peaceful coexistence of ethnic groups until 1991 seems a transitory situation. The only possible way to realize an ever lasting coexistence of different ethnic groups would be to separate the concept of ethnicity from the politics of the country.

はじめに

ボスニア・ヘルツェゴヴィナ(以下ボスニアと略す)は旧ユーゴスラヴィア(以下ユーゴと略す)を構成する共和国の一つであった。

ボスニアの主要民族はムスリム(44%)、セルビア人(31%)、クロアチア人(17%)であり、過半数を占める民族は存在しなかった。第二次大戦後これらの民族は平和に共存していた。異民族の交流や結婚も当たり前のことであった。

同国は1992年3月、住民投票をへてユーゴからの独立を宣言した。ところが独立に反対する勢力が武力による反乱を起こし、ボスニアは3年半にわたる内戦に突入した。反政府勢力に包囲され砲弾の雨を

浴びた首都サラエボの惨状、ボスニア各地で生じた「民族浄化」が世界に衝撃を与えた。内戦は1995年末に終結したものの、現在もボスニアの国内に「セルビア人共和国」が存在しており、多民族が自然に共存するかつてのボスニアの姿はない。

平和に共存していたボスニアの諸民族は、なぜ悲惨な紛争に突入しなければならなかったのだろうか。紛争に直接つながる政治の動きについては、すでに多くの分析がなされている。一般的には、チトーの時代が終わり、また社会主義の時代が終わり、かわって民族主義が台頭し、民族ごとに国家が分断されたと説明される。

しかしさらに次のような疑問が湧いてくる。ボスニアの地において多民族共存を実現することは本質

的に不可能なのであろうか。可能であるとしたら、その条件は何か。

本稿では、まずボスニアの歴史における民族と政治の関係をたどっていく⁽¹⁾。そのうえでボスニアでの多民族共存の可能性を探ってみたい。

1 ボスニアにおける民族の成立

ボスニアの人々は、6～7世紀に現在の中欧からバルカン半島に南下してきたスラヴ人の子孫であり、人種、言語は今日にいたるまで同一である。

中世初期、ボスニアは様々な侵入者によって支配された。しかし12世紀から中世末まで、ハンガリーが宗主権を保持していた時代には、ボスニアは実質的に独立状態にあった。

中世ボスニアの宗教はキリスト教であった。宗派は3つに分かれていた。カトリック、正教、そして当地独自のボスニア教会(カトリックの分派)である。しかし宗教の影響力は概して弱く、宗派ごとの宗教共同体も成立していなかった。

15世紀、ボスニアはオスマン帝国に支配された。オスマン支配はボスニア社会に大きな変化をもたらした。第一に、多くの人々がイスラム教へ自主的に改宗した。第二に、オスマンは民衆を宗教ごとに分類、管理した。これによってボスニア社会は、宗教にもとづく3つの共同体に分割されたのである。

19世紀になると民族主義がヨーロッパに広まった。バルカンも例外ではなかった。セルビアではオスマン帝国支配への反抗という形で民族主義に火がついた。次いでハプスブルク帝国支配下のクロアチアで自治を求める動きが生じた。この過程でセルビアのセルビア人、クロアチアのクロアチア人は民族としての意識を高めていった。

民族意識を獲得したセルビアのセルビア人は「ボスニアの正教徒はセルビア人である」と主張した。他方クロアチアのクロアチア人は「ボスニアのカトリック教徒はクロアチア人である」と主張した。これが功を奏し、ボスニアの正教徒はセルビア人、カトリック教徒はクロアチア人という意識を持つようになった。ムスリムはこの時点で民族という意識は持たなかったけれども、セルビア人、クロアチア人

の狭間であって、宗教を基盤とした独自のアイデンティティを持つようになった。

2 第一次大戦前のボスニア

(1) セルビア人の動向

1878年のベルリン条約によって、ボスニアの支配権はオスマン帝国からハプスブルク帝国へと移った。

オスマン時代には、教会と学校の運営にたずさわる地域共同体がボスニアの正教徒にとって重要な組織であった。この共同体はハプスブルク時代に入っても存続していた。19世紀末、ボスニア各地のセルビア人共同体は、協会と学校を共同体の自治下に置くことを求める運動を起こした。

セルビア人は政府との交渉を続けるほか、各地で集会を行い、独自の新聞を発行した。その結果政府は1905年にセルビア人の要求を聞き入れた。

この運動を通じて、セルビア人のなかに政治的指導者が現れ、政治組織も作られた。またこの運動は正教徒がセルビア人(民族)の自覚を深めるのにも役立った。

1907年にセルビア人活動家によって「セルビア民族組織」という団体が設立された。1910年にハプスブルク当局がボスニアに立憲制を導入し、議会が発足した際には、「セルビア民族組織」はセルビア人に割り当てられた議席を独占した。「セルビア民族組織」はセルビア本国の民族主義に共鳴し、ボスニアはセルビア人の領土であること、ボスニアのムスリムはセルビア人であることを主張した。

(2) クロアチア人の動向

ボスニアのクロアチア人の政治運動は知識人、中産階級およびカトリック組織によって行われた。

1908年に設立された「クロアチア民族連合」は、ボスニアはクロアチア人の領土であること、ボスニアのムスリムはクロアチア人であることを主張した。また「クロアチア民族連合」はハプスブルク支配下の全てのクロアチア人居住地の政治的統合を主張していた。これはクロアチア本土の民族主義者の主張と共通する。

1910年には「クロアチア・カトリック協会」とい

う別の団体が設立された。「クロアチア・カトリック協会」はカトリシズムへの傾斜が著しく、宗教的に排他的で、異教徒を改宗させることに熱心であった。

1910年の議会では、クロアチア人に割り当てられた議席のうち「クロアチア民族連合」が20議席を獲得したのに対し、「クロアチア・カトリック協会」は4議席にとどまった。世俗的な前者がより多くの支持を集めたのである。

(3) ムスリムの動向

イスラムを国教とするオスマン時代においてムスリムは支配的な地位にあった。農業社会のボスニアにおいて地主のほとんどはムスリムであり、小作人の多くはキリスト教徒であった。

従ってボスニアのムスリムにとって、ベルリン条約によるオスマン支配の終焉とハプスブルクによる占領は衝撃であった。それは自分たちが異教徒に支配され、地主の特権的な地位も脅かされることを意味した。

ムスリムは自らの宗教、教育、文化を守るため19世紀末から自治運動を展開した。運動を最終的に主導したのは地主たちであった。

政府との交渉の結果ムスリム側の要求はほぼ全面的に認められた。第一に、1905年の政令により「レイス・ウル・ウレマー職」(ムスリム共同体の長として宗教組織および文化活動に責任を負う)および「ワクス委員会」(寄進財産を管理する)が設置された。これらはムスリム共同体にとって重要な制度である。第二に、政府は地主の特権に手をつけなかった。政府は、旧来の社会構造に手をつけることによって大規模な反発が起こることを恐れたのである。

この自治運動においては世俗的利益(地主の特権)が重視された。その後もボスニアのムスリム共同体は世俗的性格を持ち、原理主義へ傾斜することはなかった。

1906年ムスリムの地主たちは「ムスリム民族機構」を設立した。1910年の議会においては、「ムスリム民族機構」はムスリムに割り当てられた議席を独占した。議会における「ムスリム民族機構」の主要な任務は、キリスト教徒農民の要求をしりぞけ、ムスリム地主の特権を守ることであった。

(4) ボスニアの政治情勢

先述の通り「セルビア民族組織」は、ボスニアはセルビア人の領土であること、ボスニアのムスリムはセルビア人であることを主張した。「クロアチア民族連合」は、ボスニアはクロアチア人の領土であること、ボスニアのムスリムはクロアチア人であることを主張した。

この二つの政党はボスニアでの主導権を握ることを目指していた。しかしともに単独ではボスニアにおける過半数の勢力とならないため、ムスリムを自民族に引き込もうしたのである。

しかし両党のムスリムへの勧誘活動はほとんど成果を上げなかった。ムスリムは独自のアイデンティティを確立していたのである。

ボスニアでは1910年から1914年まで立憲制がしかれ、議会が開かれた。最初の年には「セルビア民族組織」と「ムスリム民族機構」が同盟を結んだ。ムスリムとの同盟に際し、セルビア人は、ムスリム地主の特権に異を唱えないという条件を受け入れた。しかし翌年農民蜂起が発生し、ムスリムはその原因をセルビア人民族主義者の扇動にあると考えたため、同盟は解消された。その後ムスリムは「クロアチア民族連合」と同盟を結んだ。クロアチア側も、ムスリム地主の特権に異を唱えないという条件を受け入れたのだった。

3 第一次大戦とユーゴ建国

1914年6月28日サラエボでハプスブルクの皇太子が暗殺されるという事件が起こった。犯人はボスニアのセルビア人で、ハプスブルクからのボスニアの解放と南スラヴ(バルカンのスラヴ人地域)の統一を目指す「青年ボスニア」という組織に属していた。当時ハプスブルクは、バルカンの覇権をめぐり、セルビアと激しく対立していた。ハプスブルクは、セルビアが暗殺の背後で糸を引いていたと主張し、セルビアに宣戦を布告した。これが第一次大戦への導火線となったことは周知の通りである。

大戦の結果ハプスブルク帝国は崩壊した。帝国支配下にあったスロヴェニア、クロアチアそしてボス

ニアの南スラヴ人(バルカンのスラヴ人)はついに独立の機会を得た。同時に帝国の崩壊は、他の外国による侵入の危険性をも意味した。イタリアがクロアチアに対する領土的野心を見せていたのである。帝国支配下にあった南スラヴ人は早急に新しい国家を創設する必要があった。その結果 1918 年「セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人王国」(1929 年ユーゴスラヴィアに改称)が創設された。

この新国家は、セルビア、クロアチア、スロヴェニア、ボスニアを統合したものである。建前上は「南スラヴ人」の民族自決により作られた国家とされた。しかし南スラヴ人という民族概念は知識人の作り出した机上の概念であり、人々には浸透していなかった。新国家は多民族国家そのものであった。そして新国家の政治は、建国直後から激しい民族対立に見舞われることになる。

4 大戦間のユーゴ

新国家の政治において激しく対立したのはセルビア人とクロアチア人であった。セルビアは南スラヴ解放の旗手であり、また全てのセルビア人居住地域をセルビアに統合することを目指してきた。またセルビアは第一次大戦で多大な犠牲を払った。これらのことからセルビア人は、新国家の創設をセルビアの拡大と捉えた。他方クロアチア人は、自らの独立国家を持ち、そのうえで南スラヴの連邦を形成することを望んでいた。

そのため政府を主導するセルビア人が中央集権化を推進する一方、クロアチア人はクロアチア国家の創設を主張した。両者は激しく対立し、議会での発砲事件や国王(セルビア人)の暗殺まで起きるありさまであった。なおボスニアのムスリムは、地主の特権を保持するため、政府に協力する姿勢を取っていた。

国家体制をめぐる争いは 1939 年にクロアチアに自治が認められたことによって一応の落ち着きを見た。しかしこのクロアチア自治州の創設はユーゴ全体に影響を与え、セルビア、スロヴェニア、ボスニア、モンテネグロ、マケドニアの各地で同様の自治を求める動きが生じた。

5 第二次大戦中のユーゴ

第二次大戦中ユーゴはナチス・ドイツを中心とする枢軸国に占領された。ナチスはセルビアを直接統治する一方、クロアチアとボスニアを合わせた地域に「クロアチア独立国」という傀儡国家を作り、そのトップにクロアチア人極右民族主義集団「ウスタシャ」の指導者を据えた。

ウスタシャはナチスの指示に従い、領内のユダヤ人をドイツの収容所へと移送した。同時にウスタシャは領内のセルビア人の根絶を目論み、多数のセルビア人を虐殺、追放した。これはセルビア人の怒りに火をつけ、セルビア人抵抗組織「チェトニク」が結成された。チェトニクはクロアチア人やムスリムの虐殺を行った(当時ウスタシャはムスリムに対して寛容で、少なからぬムスリムはウスタシャに協力していた)。

ボスニアの地において民族的帰属にもとづく虐殺が初めて行われたのは、第一次大戦中にハプスブルク軍がセルビア人を大量に殺害したときである。しかしボスニアの住民同士の虐殺はウスタシャとチェトニクによるものが初めてであった(1990 年代には民族主義者が人々を洗脳するためこの虐殺事件を利用した)。

この最悪の状況のなかユーゴの共産主義者がナチスへの抵抗運動を組織した。チトー(Tito)のバルチザンである。チトーは、諸民族が協力してドイツと戦うことを説き、民衆の支持を広げていった。バルチザンは、貧弱な武器しか持たなかったにも関わらず、民衆の協力を得て、多大な苦難の末、ほぼ独力でナチスを駆逐した。バルチザンは「伝説」となり、チトーは「英雄」となった。

第二次大戦後ユーゴは社会主義国家として再出発した。戦前の民族対立や戦中の虐殺にも関わらずユーゴが再び船出できた理由として、バルチザンを通じてナチスという「共通の敵」と戦うことで諸民族が結束できたこと、ナチスとの戦いに勝利した結果バルチザンとチトーが民族の壁を越える求心力となったことがあげられる。

6 第二次大戦後のユーゴ

第二次大戦終結後 1970 年代までのユーゴは比較的平穏な時期であった。戦後のユーゴは 6 つの共和国からなる連邦国家かつ多民族国家であり、各共和国と各民族は平等であるとされた。

チトーは戦後間もなくスターリンと対立した。そのため 1948 年にユーゴはコミンフォルムから追放される。スターリンとの対決で一步も引かなかったことで、チトーのカリスマ性は高まった。

ソ連と決別したユーゴは、ソ連型とは異なる社会主義体制を目指し「労働者自主管理」という制度を作り上げた。また冷戦下において米ソいずれの陣営にも付かない「非同盟政策」を掲げ、インドやエジプトを含む非同盟諸国のリーダーとなった。これによってチトーは国際政治においてもスター的存在となり、そのカリスマ性は一層高まった。

チトー時代のボスニアでは民族間の垣根が低くなる傾向が見られた。第一に、1945 年の農地改革により、ムスリム地主の特権は廃止された。第二に、工業化の進展により多くの人々が農村から都市に流入し、都市部の新しい集合住宅では異民族が混じり合って住むようになった(農村部においては民族ごとに分かれて住むことが一般的であった)。第三に、都市部では職場、学校でも諸民族の混在が進んだ。異民族間の結婚も当たり前のこととなった。

7 民族主義の台頭

ユーゴにおいてカリスマ的指導者としての地位を不動のものとしたチトーも 1980 年に死去する。

また 1980 年代には経済危機がユーゴを襲った。これに対し共産主義者同盟(ユーゴ共産党)は有効な手立てを打てなかった。他方世界的に社会主義が凋落していた。社会主義への人々の信頼は揺らいだ。

チトーを失い、社会主義への信頼も揺らぎ、ユーゴでは政治的空白が生じた。この空白にうまく入り込んだのが民族主義を唱えた政治家たちである。

政治的空白以外に民族主義が支持を得ることができた理由として、次のことがあげられる。第一に、経済的不満は民族主義につながりやすい。人々は「彼

ら(異民族)のせいで我々(自民族)が貧しい」あるいは「彼らが我々の富を吸い上げている」といった主張に動かされやすいからである。ユーゴの最貧地域であったコソヴォでは、1981 年にアルバニア人が大規模な暴動を起こし、経済的不満を爆発させた。この事件を契機にセルビア人とアルバニア人の対立が高まっていった。逆にユーゴで最も豊かであったスロヴェニアは、他の共和国によって経済的に足を引っ張られることを懸念し、連邦離脱へと動いた。

第二に、経済危機による不安から人々を救うものとして、仲間との団結や郷土愛を説く民族主義はうってつけである。

第三に、異民族への警戒心や憎悪を煽るような洗脳がさかんに行われた。そのさい民族主義者は第二次大戦中のウスタシャやチェトニクによる虐殺を利用したのである。

さてユーゴでは 1990 年、戦後初めての複数政党制の選挙が各共和国で行われた。共産主義者同盟による一党独裁の放棄は、各地で高まる自由化要求にこたえたものであった。選挙の結果、民族主義を唱える候補者がかなりの成功を収め、各共和国に民族主義的傾向の強い政府が成立した。

ボスニアでは 1990 年 11 月に選挙が行われた。その結果「民主行動党」(ムスリム系)「セルビア民主党」「クロアチア民主同盟」の 3 つの民族主義政党が大方の議席を占めた。各党の議席数は各民族の人口比率と概ね比例していた。

ボスニア政府はこの 3 党による連立政権となった。政府において主導権を握っていたのは最も議席数の多い「民主行動党」であった。同党の指導者アリヤ・イゼトベゴヴィッチ(Alija Izetbegovic)がボスニア大統領となった。しかしその他の主要ポストはセルビア人、クロアチア人にも与えられた。

8 独立をめぐる動き

ボスニアで政権についた 3 党はボスニアの将来像についての議論を始めた。しかし 3 者の間には大きな溝があった。ムスリムやクロアチア人はボスニアが独立すべきであると主張したのに対し、セルビア人はこれに反対した。「民主行動党」は 91 年 1 月に

ボスニアの主権宣言を提案した。「クロアチア民主同盟」はこれに同調したけれども、「セルビア民主党」は反対した。「セルビア民主党」は、独立によってボスニアのセルビア人が少数派になることを嫌ったのである。

セルビア人のこのような動きは、少数派に転落すると平等かつ公平な扱いを受けられなくなるのではないかという懸念に起因していた。イゼトベゴヴィッチは民族主義者であり、セルビア人の懸念は故なきことではない。他方セルビア大統領のスロボダン・ミロシェヴィッチ(Slobodan Milosevic)はこうした懸念を積極的に煽り立てた。ミロシェヴィッチは、クロアチア大統領のフラニョ・トゥジマン(Franjo Tudjman)とともにボスニアの分割を目論んでいたと言われている。

91年10月ムスリムとクロアチア人は、セルビア人との合意をあきらめ、ボスニアの独立を求める決議を採択した(セルビア民主党の議員は採択に先立ち退席していた)。これに対しセルビア人は同年12月、独自の共和国を創設することを宣言した。またセルビア人は、独自の住民投票(91年11月から92年1月にかけて3回行われた)により、ボスニアが独立した場合には国家を支持しないことを表明していた。ここにきてボスニアの一体性はがけつぷちに立たされた。

国際社会においてはECがユーゴ問題への取り組みを主導していた。92年1月に公表した報告書においてECの委員会は、セルビア人の意思に鑑み、ボスニアを主権国家にしようという住民の意思が完全に確立しているとは考えられないという評価を下している。他方、独立の是非を問う住民投票が国際的監視のもと平等に行われるのであれば、評価が修正され得ることも示唆していた。ボスニア政府は住民投票を92年2月29日と3月1日に予定していた。

9 内戦の勃発

セルビア人勢力は、ムスリムとクロアチアが連合すればセルビア人が住民投票で勝つ見込みはないと、ECに意義を申し立てた。ECはこれを受けて、住民投票の直前に3党の代表をリスボンに招聘し、ボス

ニアの「カントン化」すなわち3勢力によるボスニア分割に合意するよう折衝を試みた。セルビア人指導者ラドヴァン・カラジッチ(Radovan Karadzic)とクロアチア人指導者マテ・ボバン(Mate Boban)はこれに合意した。イゼトベゴヴィッチもいったんこれに同意したけれども、その後合意を撤回した。そのためカントン化は実現にはいたらなかった。

カントン化に向けての努力の一方、住民投票の日が迫った。カラジッチはボスニアのセルビア人に対し、住民投票をボイコットするよう呼びかけた。

そして住民投票の日が訪れた。セルビア人はほとんどが投票をボイコットした。ムスリムとクロアチア人はほとんどが投票し、投票総数の99%がボスニアの独立に賛成となった。

投票日の2日後、セルビア人武装勢力はボスニア北部の町ボサンスキー・ブロードを砲撃した。3月末にはセルビア人勢力に協力するユーゴ連邦軍がボスニアへの攻撃を開始した。4月6日にはサラエボでムスリム、クロアチア人そしてセルビア人が加わった大規模な平和デモが行われた。このデモに対してセルビア人の狙撃兵が銃火を浴びせるという事件が起こった。新生ボスニアでは戦火が急速に拡大していったのである。

10 多民族国家の構造的リスク

これまで民族の成立から1992年の内戦勃発までのボスニアの歩みを見てきた。ここで明らかなことは多民族国家の抱える構造的なリスクである。すなわち少数派の分離独立と国家分裂の危険性である。

ヨーロッパでは19世紀以降民族が次々と成立した。それまで政治にあまり関わりのなかった一般の民衆が、民族と呼ばれる集団を形成し、政治的主体として歴史の表舞台に躍り出てきたのである⁽²⁾。

もちろん一つの民族のなかにも意見の違いはある。しかし民族全体の利益を確保することがまず求められる。たとえ内輪もめがあったとしても、異民族との対立においては、民族は結束すべきである。これが民族をめぐる一般的な感覚であろう。

さて民族の理想とするところは、民族の自治、すなわち外国人や異民族に支配されるのではなく、自

分で自分を治めることである。突き詰めればそれは民族が自らの国家を持つことを意味する。民族は独立国家を持つべきであり、その権利を有しているというのが民族主義の根本的な思想である。

ボスニアのような多民族国家において民族主義はどのような結果をもたらすであろうか。多民族国家の政界においては、各々の民族の利益を代表する政党が勢力を分け合う可能性が高い。事実ボスニアでも、1990年に戦後初の複数政党制による選挙が行われたとき、多くの人々が自民族の民族主義政党に投票した。

一国の政治において複数の民族主義政党が並び立つ状態は、本質的に不安定である。各党が取り得る道は、他党と組んで連立政権を作る、野党として「穏健に」活動する、民族の独立を志向する、の3つに1つである。分離独立は国家の分裂を意味し、紛争を招きかねないけれども、民族主義の原則からすれば正統な道である。逆に、各党が多民族共存を支持し、平和裏に連立するのであれば、国家には安定がもたらされる。しかし将来民族の利害の衝突が生ずれば、連立はたちまち危うくなる。

もちろん単一民族国家においても、考えの違う政党が議会で並び立つことは普通である。しかし、たとえば日本共産党が党員を引き連れて分離独立を目指すことなどあり得ない。多民族国家の政治とは基本的な構造が異なるのである。

このように多民族国家は構造的に不安定であり、国家分裂のリスクを内包しているのである。

11 民族を越える求心力

さて20世紀初頭のボスニアでは3つの集団が成立し、そのうちセルビア人とクロアチア人は国外に「本拠地」を持つこととなった。これはボスニアの一体性にとってきわめて危険な状況に見える。民族主義の原則に従えば、ボスニアは3つに分割され、セルビア人地域とクロアチア人地域は本拠地に合流すべきなのである。

しかしボスニアは分割されなかった。ユーゴが建国されたことでボスニアの分割はあり得なくなったのである(もっともボスニアでは3集団の居住地域

が入り組んでおり、分割しようにも出来なかったかも知れない)。

ところが建国後のユーゴではセルビア人とクロアチア人が激しく対立し、第二次大戦中に民族相互虐殺という最悪の事態を経験した。

この時期のユーゴを見ると、やはり多民族共存は本質的に困難ではないかと感じられる。しかし戦後ユーゴは再び船出し、一応の安定を見せた。それを可能にしたのは民族の壁を越える求心力であった。すなわちパルチザンの伝説とチトーのカリスマ性である。

注目しておきたいことは、この求心力の源がユーゴ諸民族の「共通の敵」に求められたことである。チトーは、民族の壁を越えてナチスと戦うことを訴え、人々の共感を得た。ナチスという強力な敵を駆逐したことがパルチザン伝説の核となった。チトーはパルチザンの英雄として名声を得、さらに戦後スターリンとの対立において一步も引かなかったことでそのカリスマ性を高めた。

しかしこの求心力はいずれ失われる運命にあった。共通の敵はいずれ消滅し、パルチザンの記憶はいずれ薄れ、チトーはいずれ他界するからである。

12 多民族共存の可能性

チトーを中心とした求心力が「共通の敵」を梃子とした一過性のものであるとすれば、ボスニアはいずれ民族主義によって引き裂かれる運命にあったのであろうか。ボスニアにおける多民族共存は本質的に不可能なのであろうか。現実においてボスニアの地は、内戦中民族ごとに分断され、現在も「セルビア人共和国」が国内に存在している。

多民族共存を実現する手段として、次の3つの選択肢が考えられる。第1は、チトーに替わる新たな「民族を越える求心力」を得ること。第2は、民族という概念そのものをなくしていくこと。第3は、民族という概念は維持しつつ、政治と民族を分離することである⁽³⁾。

第1の選択肢はすぐに実現可能なものとは思えない。民族を越える求心力を見出すことは容易ではない。民族以上に人々を強く引き付けるイデオロギー

も見当らない。ボスニアという国家への帰属意識が民族への帰属意識を凌駕するという状況もすぐには訪れそうもない。

第2の選択肢も現実的ではない。民族という概念は深く人々の心に根を下ろしているからである。

第3の選択肢すなわち「政治と民族の分離」も決して容易なことではない。民族は政治的主体だからである。しかし民族を政治的主体から文化的共同体へと変容させ、政治の場から民族的要素を取り除いていくことは考えられる。

政治と民族の分離は非常に困難な課題である。しかし多民族共存を実現するためには、これが唯一の実現可能性のある方法であると思われる。

おわりに

ボスニアの歴史をたどると、この国が「引き裂かれた国」であるという印象を強く持つ。ボスニアは中世から政治的一体性を維持し、異なる信仰を持つ人々が自然に共存してきた。近代に入り、オスマン帝国が侵入し、ボスニア社会を宗教によって切り分けた。19世紀には外部のセルビア人とクロアチア人が介入し、宗教共同体を政治的な民族に変えた。1990年代においてもセルビアとクロアチアが民族主義の立場からボスニアの分裂に一役買った。外部からの度重なる介入によって、そして民族主義というイデオロギーによって、ボスニアの一体性は失われていったのである。

同時に、歴史をたどれば、民族というものを絶対視する必要はないことに気づく。民族は古来続くものではなく、近代以降に成立した比較的新しいものである。従って民族を文化的共同体へと変容させることは決して不可能ではないだろう。ただしその具体的方法については今後検討する必要がある。

奥村大作訳『ナショナリズム』(学文社、2000年)など。
 (1) あくまで民主主義的政治体制を前提とした場合である。
 独裁的政治体制においては、強権により民族主義を押さえ込むという選択肢もある。

(Received : September 30, 2005)

(Issued in internet Edition: November 20, 2005)

(1) ボスニアの歴史における事実関係については、主としてロバート・J・ドーニャ、ジョン・V・A・ファイン(佐原徹哉、柳田美映子、山崎信一訳)『ボスニア・ヘルツェゴヴィナ史』(恒文社、1995年)および柴宜弘『ユーゴスラヴィア現代史』(岩波書店、1996年)に依拠する。

(2) 民族(nation)という言葉の定義は代表的なナショナリズム研究に依拠する。エリ・ケドゥーリー(小林正之、柴田卓広、